R6 年 10 月 10 日（木）ランチミーティング議事録

“スーパー救急に向けて、優秀な人材確保が必須です”

その取り組みのひとつとして、9月 24 日、「精神科アンサンブル」も出版されました。
さらに、わたしたちに何ができるか・・・・自分が職場を選ぶときを思い浮かべて下さい。

当院に興味をもったとします。きっと情報収集をしますね。すると、**ホームページ**を見るでしょう。

そこに何があることで、その病院に心惹かれますか？

それは「ここで働いてみたい」と思わせる**採用ページ**です。

ランチメンバーで一丸となり、心惹かれる**キャッチフレーズ**、それに続く**文章**を考え、魅力的な採用ページを作りましょう。』

髙坂：今回配布した“杜のホスピタル・スタッフ募集”の文章を書いていて反省もあった。介護職や調理員の面接の他は自分は関わってきた。例えば配布資料には、コミュニケーション能力をシャクルトンは重視したと書いている。自分が参加した面接でそれが見れたかというとそうではなった。蚊の鳴くような声で話す応募者もいた。当院のホームページを見ていないという人もいた。
数が足りないからといって誰でもよいという考えが我々の中に無きにしも有らずだった。今後、これから何年か努めようとしている職場のホームページを開かないという人は採用しないことにする。ホームページも見たうえで、面接場面で自分の考えや意見を言えて、質問もできてという人でないと―そういう基準もこちら側できっちりしておかないと。あそこへ行けばだれでも雇ってくれるという評判もあるかもしれない。これからはやせ我慢をして、そういう人は雇わないことにする。その代わり、自分たちの情報はきっちりと知ってもらって、“精神科医療アンサンブル”の本も読んでもらって、そのうえで、という人でないという気持ちがけっこうある。
それで、皆さん方が魅力的なキャッチコピーを考えてきてくれたと思う。僕がかっこいいと思っているのはこのシャクルトンのキャッチコピー。これよりカッコよいのは無理だから、他の方面からせめて、忌憚ない意見を。
多田：これを読んで、みなさんいけますか？誰かトップバッター。
石川：おらんのだったら。キャッチフレーズを発表します。地域に根差した活動を積極的にしているので、それを理解してくれるスタッフと働きたい。
『心の豊かさを育む地域性　これからの精神科医療を一緒につくろう』
『心を支える病院に　あなたのエネルギーを必要としています』
『わたしたちのチームに加わりませんか　あなたの知識と経験を生かせる杜のホスピタル』
　なかなか長い文章を最後まで読む人も少ないかなという思いもあって、関心がある項目を選べるようなホームページにして、その一部に先生のこの文章を載せるというのも良いかと。
　例えば、「給与」「教育（卒後教育、臨床）」「学会発表」「理事長の想い」など知りたい情報をカテゴリーにして必要に応じて開けるようなかんじ。
髙坂：今回の配布資料では、僕は最後まで読めるような人でないといかんと思い長くした。昔ドイツに留学した。コルンフーバーという論文でしか知らない教授の研究室に応募したが、彼のあらゆる論文や写真など全部チェックした―本当に興味関心があればそんなことは何でもないと思う。

ホームページをいくらでも見られる時代。そこにきっちりと情報を盛り込むことが我々の責任だと思う。キャッチコピーとして採用のあかつきには多大な…
多田：まじめにやってしまった。本からとったりした。キャッチフレーズは
『楽しんだ者勝ち　わたしたちで作る精神科医療』続く文章は
「現在の精神科医療は欧米に比べてずいぶん遅れておりたくさんの課題をかかえています。患者の長期入院、医師をはじめとする医療スタッフ不足、患者の社会復帰の困難な医療・社会環境など問題は山積みです。杜のホスピタルのスタッフは現状を打破すべく多職種による医療の在り方を工夫し実践しています。それはまるで、医師が指揮者、各専門スタッフが楽団員となって構成されるオーケストラのようです。
当院のチーム医療においてスタッフには親身に患者に寄り添い、彼らから信頼されるスキルとチームの一員としての協調性が求められます。そしてわたしたちは、工夫を楽しむ人種です。私たちと一緒に未来の精神科医療を築きませんか？各専門スタッフによる取り組みは、各課のページでご覧いただけます」としておいて、院内でショート動画を撮り、それを載せる。生き生きとした動画を載せることで生き生きとしたやりがいのある職場の雰囲気が伝わると思う。
西田：『忙しいですが、当院でもう一度輝いてみませんか。
ここではいろいろな経験ができます。毎日毎日変化や気づきがあってとっても楽しいところです。今までの自分がどんどん変わっていきます。そして、あなたの個性が生きる職場です。さて当院には７つのＣがあります。７つのＣとは何でしょう。この病院で働けばわかります。
そして、８つ目、９つ目のＣを一緒に考えてみませんか。』
山西：入職したきっかけということでいうと、医療サイトで見たのが、ゆったりした環境。穏やかな気候の中で働いてみませんかというフレーズがついていた。はやりとしてはどうかわかりませんが、確か私、書類を出したときに書いた文章は、杜のホスピタルが阿南市の精神科医療の基幹病院となれるよう、ひいては県南の基幹病院となれるよう努力しますと書いたと思います。
中井：55 個くらいあるんですけど・・・。キャッチフレーズ、ホームページの中身をもう少し増やせられたらなという視点。個人的に考えていたが、当院でしていることが他の病院では当たり前でないということを伝えられたら。当院は学術面においてサポートが充実しているなというのがある。例えば、勉強会・学会で発表するとき初めは不安で何を書いたら良いかもわからない。書き方の指導、添削、発表の練習もさせてくださって本番を迎えるというサポートが充実している。学会発表は僕にとって興味のある所なので、そういったところが手厚いことをアピールしたい。また、図書室の司書がいるということも。普段は自分で検索しないといけない文献を田口さんがしてくれる。それも伝えられるとよいのかなと。他にもいろいろ考えていたら、看護学校の奨学金制度や、医者であれば現在の先生ができるサポートや、多職種間の連携についても。あとは有給休暇をキチンととれることであったり、時間給が取れたりも充実していると感じている。沢山、当たり前じゃないことがある。チーム医療についてもそう。ここでやっていることを項目にして、情報開示をしていけばよいのではと思う。
キャッチフレーズは
『ともに精神科医療の文化を築こう』で終わります。
吉田：キャッチフレーズだけ考えたが、それに行き着いた経緯をまず説明します。もともと私は作業療法士で精神科志望し精神科病院に入職しました。以前働いていたのは超慢性期。働きながらも、自分の家族が精神疾患になったら入院させたいと思える病院ではなかった。自分の働いていた病院が誇れなかった。いろんなご縁があり、旧藤井病院に入り、髙坂先生が来られ、杜のホスピタルになった。いろんな部分が変わり、精神科医療としてちゃん治療ができるようになった。患者が入院してきて治って帰るということができている。今は働いていて誇らしい。そこから

『自分が誇れる精神科病院で一緒に働きませんか』
というフレーズを考えました。
四宮：キャッチフレーズということで・・・　個人的にキャッチフレーズといえば、病院の名前を入れたいと思った。“精神科医療アンサンブル”の本が出て、救急の必要性や人員配置的に手厚くない部分もあるが質の高い関わりが大切。何かあったときに頼ってもらえるような
『こころのレスキュー杜のホスピタル』と、時計台の「カルペディウム」の「今を生きる」といことばが自分はすごく好きなので
『今を生きねば　Together with 杜のホスピタル』
櫻木：自分がここに入り仕事をして、すごくインパクトのある事。ここの病院ならではだなと思ったのが成長すること。家族さん、患者さんも、病気を治すだけでなくて生活自体を見ていくこと。
『Grow together all, for life』
渡辺：『チームワークが支えになる　だから誰もがチャレンジできる』
『人と想う看護をともに　あなたの力が必要だ』精神科治療を支えるのは多職種チームによるきめ細やかな援助だと考えている。それぞれの専門性を生かして患者とともに治療に取り組み、リハビリテーション、社会復帰に向け取り組んでいます。また何事にもチャレンジできる、自分も成長できえる職場環境を目指しています。
野村：「私たちとともに働きませんか」と書いて、各部署ごとに開いていけたらいいなと思う。わたしが求人を探すときも他の帆オームページをいろいろ見ていたが、ここのホームページの印象が、建物がきれいなのと、美術品が豊富という点。若い人は情報を目でとる傾向があり写真を見るので写真を多く。若いスタッフが入ってきたら、病院も活性化するので。看護師は部長、師長の考えを重視する傾向があり、自分も同様。看護部長の考えなどを載せるほうが良いのでは。一般科から来る人もいるが、これまでのキャリアがなくなってしまうと思う人もいると思うが、ここにくることで新しい学びをもらえるということが分かればよいと思う。看護研究や外部の勉強会に参加させてもらえることも全面に出していくことで、勉強熱心な人材が集まるのではないかと思う。
青木：自分がここに応募したのは精神科だと楽ができると思って。今はずいぶん変わってきて、自分もやる気をおこさせてくれるような病院になったかなと思う。多職種連携というのが一番、活発な意見が出て、仲が良い。今まで多職種連携といいつつもなかなか言い合えなかったが今は違うところを全面に出していきたい。自分の工夫を取り入れ生かしてくれる職場だと思うので、キャッチフレーズは
『多職種が互いに言い合えて楽しめる職場です　あなたの工夫を生かせる職場です』
森岡：キャッチフレーズを考えてなかったが、徳島の人って南に動かない。なので医療センターの方も同様に本当に困ってらっしゃって、苦肉の策ではあるが、なかなかこの近辺から良い人材が来てくれるのは難しい。県外から来てもらうとすると、阿南の土地がどんな土地なのか・・・住む場所としての魅力、地域力、杜のホスピタルの影響で良い魅力ができたとか・・・
自分が大阪から阿南に来るにあたって、自分が大阪でやってきた精神福祉を遅れがちなを徳島でやったらすごい最先端じゃないかと思ったので、それもポイントになるのではと思った。
久米：西の高野山とか？太龍寺は西の高野山といって有名だから。
羽田：携帯のホームページを見たが、「当院の考えに賛同された方は・・・」となっていて、その内容も良い文章で全部読んだ。　あの文章を見て応募してくれた人は、それに納得して応募してくれている方なので、一見やる気のないように見えても、私たちがやってることを見てもらって、それについて育ってくれたらいいと思う。マンパワーがないことにはスーパー救急もできないし、人を育てていくつもりで。うちの病院は働きやすいと思う。他院のホームページも見たが、働きやすさを前面にしているサイトも多かった。中途やブランクのある方の応募も多いと思うので、それも踏まえたうえでキャッチコピーは、『自

分らしい働き方で、人を支える仕事をしてみませんか』
また、精神科であるので、
『聞き上手の人を求む　聞き上手な自分の特技を生かしてみませんか』はどうでしょうか。
多田：面接でホームページの感想を尋ねても良いのでは。
岡本：マグネットホスピタルというのを以前から言っていて。それは職員だけでなく患者ももちろん吸い寄せられるところ。人々がここへきて癒されて自分を取り戻していく場。専門職の人はここで学んで働きたいという場所。そういうのを文章で書けたらよいなと思う。
キャッチコピーは
『あなたの青い鳥はここにいます』
西村：「アンサンブル」の本を読んで感じたこと。看護師ではなく、別人として読んで、レビューしようと思った。いろんな問題があるが、それを考えて工夫し続けることが大事で、それが次の世代に繋がると感じた。挑戦を楽しめることを含めそれらをもとに考えたキャッチフレーズは
『一緒に挑戦を楽しもう』
しかも、英語より日本語の方がよいと思い「挑戦」とした。
多田：ありがとうございます。このような感じでもう終わりますか。
髙坂：僕は地域にはこだわらない。全国で戦えるような病院にしたくて本を出した。北海道、関東、関西などでい病院はほとんど見ている。一番関心したのはのぞえ病院。
うちも全国区でやれると思うからスタッフと一緒にやれると思うからあの本を出した。あくまでも全国区で戦います。そうしなければ通用する病院にならない。
愛媛県の内子の料亭かわせみの福岡氏より 2 か月前に手紙が来た。当院のホームページに力強さがないと言われた。良いことは書いてあるが力強さがないと。今日のみなさんの発表を聞いてて、ある程度力強さも出てきたかなと。これをどうやってまとめるか・・・この会議の様子をそのまま再現しても良いのかなと感じた。タイトルが杜のホスピタルに良い人材を集めるためにこういう話し合いをしたというのを載せても。そうすると、いろんな人材がいるなということが伝わるのではないかと思う。10 月 11 月は人材募集のために全力を尽くすという月にしましょう。
来月 11 月には、ヨーロッパからトップクラスのバイオリニストの Azoitei さん、ピアニストの Ungureanu さん来てくれます。全力をあげてよいコンサートを作りましょう！
EIEI Oooooo～！！！

2024.10.10　司会　栄養課　多田
書記　連携室　森岡（多田）